

交替制勤務が看護職者の社会性に及ぼす影響

上野貴子* 内藤理英* 菅原文子* 浅井美智子** 一瀬貴子***

要 旨

看護職者は、社会の中で生きる対象を理解する。自らがその社会・文化の中で生活し、多様な関係の中で体験や感覚が、対象理解に大きくつながる。しかし多くの看護職者は交替制勤務についている中で、社会や家庭の中での役割を遂行しにくい現実がある。大方の看護職者は女性である。性別役割分業がまだまだ根強く残っている状況において、仕事と家庭の両立ばかりか、社会との両立も含めた生活を要求される看護職者は、なんとか折り合いをつけて生活しているのであろう。

本研究は、交替制勤務が看護職者の社会性を培う活動にどのように影響を及ぼしているのかに探ることを目的としている。一総合病院に勤務する看護職者440名への質問紙調査により、以下のことが明らかになった。

1. 平均年齢は3交替群31.9歳、当直群45.7歳、日勤群は38.5歳と差が大きい。3交替群でも3人に一人は同居の子どもがおり、当直群、日勤群ではさらにその割合は高い。
2. 夜勤のない日勤群が、3交替群や当直群と比べて健康的な生活を送り、疲労感も少ない。3交替群と日勤群では、休日は身体・精神面の充足にと考えている人が多く、特に3交替群では、実際に休日にはゆっくり休養をとっている人が半数以上である。
3. 3交替群は当直群と比べて、職場以外の友人との交流は高いが、地域社会での活動、社会に関する情報収集、ボランティア活動において低い。家族的な活動については3交替群の方が家族そろって食事をとるという項目で低く、また夫との家事分担も低い。しかし、当直群の方が、子どもに寂しい思いをさせており、同居家族の負担が大きいと感じている。
4. 3交替群と日勤群の比較では、日勤群の方がそろって食事ができると感じているが、その他の家族的活動、および社会的活動のすべてで、差はみられない。
5. 配置換えや勤務交替という方法や、車通勤による時間の捻出などにより、家族的活動を調整している。
6. 家族との同居率は高く、既婚者は特に父母や義父母など、三世代同居している人が多い。これは地域的な特徴でもある。しかし、未婚者の3交替群にも父母との同居が多い傾向がある。社会的活動や家族的活動が家族内支援によってまかなわれていると考えられる。

キー・ワード：交替制勤務、社会性、看護職者

はじめに

看護職者が対象の生活を理解し、その人の生活の流れに沿って支援できるか否かは、看護職者自身が一人の生活者として社会の中でいかに生きてきたか、生きているかに影響される。その社会・

文化の中で生活し、多様な関係の中で養ってきた体験や感覚が、社会の中で生きる対象の理解につながる。ところが、24時間継続した看護ケアの提供が必要とされる施設や病院では、交替制勤務が不可欠である。交替制勤務についている看護職者

所属：*本学 短期大学部 基礎看護学

**松蔭女子大学 経営文化学部

***山梨県立中央病院

は、一人の生活者として社会の中で生きながら、かつ交替制勤務を行っているのである。

嶋森¹⁾は「交代制勤務をする職業の者は、しばしば2級市民と呼ばれる。つまり市民として通常負うべき社会的な責任を負えないことが一般的であるからである。」と述べている。これは、交替制勤務をする看護職者は、社会関係の中で培った体験や感覚が必要とされるのにも関わらず、社会的な活動に参加できないことを意味する。本研究は、交替制勤務が看護職者の社会性にどのように影響を及ぼしているのかを明らかにすることを、目的としている。

I 文献検討

1. 看護職者の交替制勤務労働に関するもの

山崎ら²⁾は、1991～1997年の440件の文献を検討し、研究方法の傾向について「各年とも、交替制勤務から生じる疲労の状態をどのように測定するか、また、その回復はどのようにしたら充分であるか、どのようにすれば少ない疲労で勤務できるか、などに焦点があてられた研究がなされてきた。」と述べている。最近の研究では、質問紙調査ばかりでなく、生理的生化学的な手法を用いた研究も報告されるようになってきた。たとえば、中村ら³⁾の唾液中コルチゾールと体温や握力などから3交替勤務者のサーカディアンリズムの変調をとらえた研究や、相垣ら⁴⁾のWrist-Activity-Rhythmをとらえた研究などがある。

このように、疲労やサーカディアンリズムの変調など、看護婦の身体・精神面との関係において、交替制勤務、特に夜勤の影響を明らかにしてきた研究の蓄積がある一方で、他にはどのような観点から交替制勤務を考えたらよいのだろうか。前出の山崎ら⁵⁾は「看護職員の望ましい勤務体制とは、患者のニーズに適した良質な看護提供を保証するものであるとともに、看護職員の専門性が高められ、充実した個人生活が達成されるものである。」と述べている。また嶋森⁶⁾は、「交替制勤務が看護婦にもたらす影響」の中で、「社会的・職業的および家庭的な問題」を取り上げ、セルフ・スケジュールリングの考えを取り入れることを推奨して

いる。さらにRuth R.AlwardとTimothy H.Monk⁷⁾は、「ナースはシフトワークのために、社会的、職業的および家庭的な活動の時間配分を根本的に変えなければならないため、それらの活動は仕事のスケジュールによって中断され、多くの場合、家族や友人や同僚とのかかわり合いも制限されたものになってしまう。」と述べている。このように、交替制勤務を考えるもう一つの視点として、看護職者の社会性をとらえることが重要と考える。

2. 看護職者の社会性に関するもの

1992年の診療報酬改定において、基準看護承認病院においても、2交替制勤務が検討されることになった。これに伴い、2交替制勤務への移行を視野に入れた様々な実態調査や研究が、報告されている。

2交替制の長所・短所を考える場合、必ずと言って良いほど、看護職者自身の社会生活が焦点のひとつにあげられてくる。やや古いが、1997年の日本看護協会の調査⁸⁾では、3交替勤務の経験がありかつ現在2交替勤務に従事している看護職者に、3交替と2交替の比較を調査し、『『疲れにくさ』と『患者サービスの質』については『どちらともいえない』が約半数、『業務遂行上のゆとり』と『私生活との両立のしやすさ』では、『2交代の方がいい』との回答が多数を占めた」と報告している。相垣ら⁹⁾も、2交替性導入3か月後のスタッフ調査から、業務遂行や身体面でのメリットのほかに「私生活が充実する」「休みがまとまってとれる」等をあげ、95%が2交替制を希望したと報告している。原¹⁰⁾は2交替制に勤務体制を変更した施設の看護職者への質問紙調査から、その評価を「業務上の利点」の他に「私生活上の利点」として、「生活時間、余暇の増加」「家族との生活に好都合」があるとし、「看護サービスの質を維持向上するためには、看護職にある者の私生活が、社会的リズムに限りなく近い日常を保証することである。」と結んでいる。看護管理者は、看護職者の社会性を視野に入れた改善を考えねばならないことを、前面に押し出している。

また、1999年9月の第14回国際夜勤交代勤務シンポジウムの学会レポートで、「家族との関係が良好な人、とりわけパートナーの支えがある労働者は、交代制勤務への適応性が高い」¹¹⁾ という報告もあったという。

ではこれらの実態調査では、社会活動または社会性、私生活、家庭生活などをどのように定義づけ、構造づけているのだろうか。残念ながら、これまでの看護系文献の中にはこの疑問に十分答えられるものが見つからない。これはこの種の研究が、睡眠障害やサーカディアンリズムなどのように研究の蓄積が十分ではなく、その測定方法も確立されていない現状にあることを示していると考ええる。

II 研究目的

交替制勤務が看護職者の社会性にどのように影響を及ぼしているのかを明らかにする。

III 研究の概念枠組み

研究者らの自由討論及び「女性労働」「シフトワーク」「夜勤」等をキーワードに文献検討をした結果、図1のような独自の概念枠組みを作成した。特に、構造化については、連合女性局編集の「生活時間帯の構成」¹²⁾を、また具体的な構成項目にあたっては労働科学研究所編集の「生活調整」¹³⁾の項目を参考としている。

IV 用語の定義

社会性とは、自己をより広い意味で相対化することが可能な能力で、職業活動以外の社会的活動および家庭的活動によって培われる。社会的活動とは、地域社会や自主的な組織への活動参加、あるいは自己学習など、幅広い職業以外の活動をさす。また家族的活動とは家族関係及び家族に関わる活動をさす。さらに活動とは、実際に表現された行動領域と、その行動に到るまでの意識・考え方・価値観等の認知領域をも包括したものである。

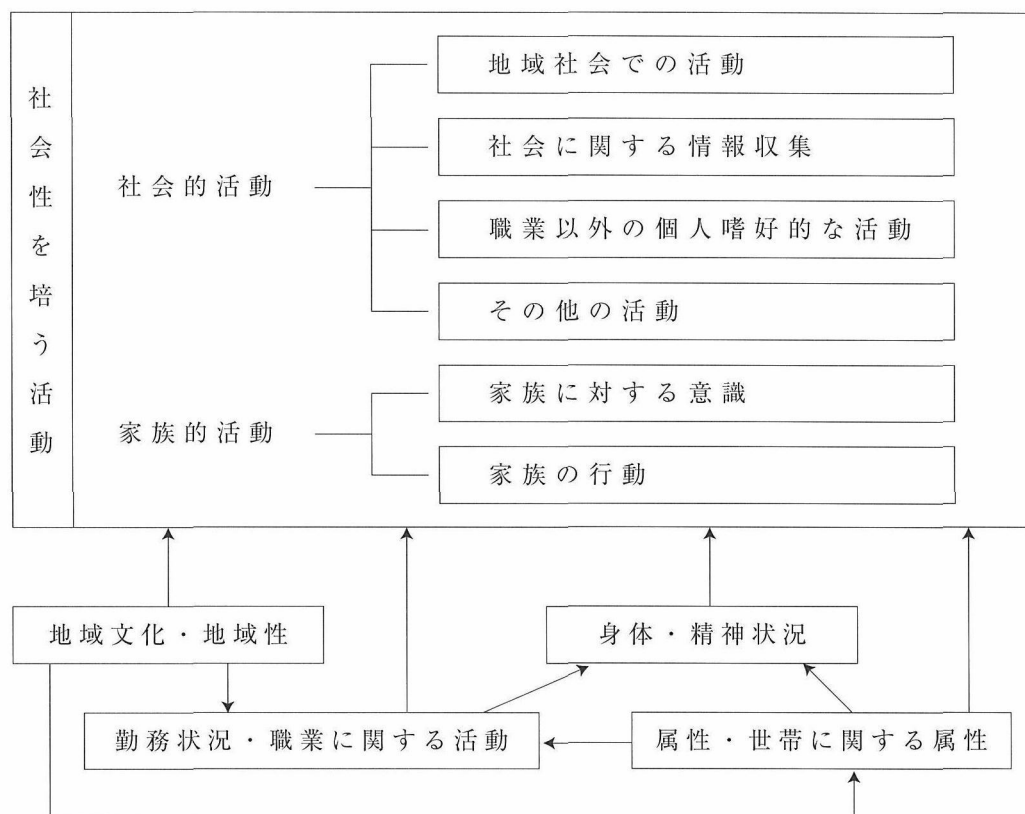


図1 研究の概念枠組み

V 研究方法

1. 対象 地方都市にある一総合病院に勤務する正職員の看護職者 440名(4月採用者35名を含む)

2. 調査時期 2000年6月

3. 調査方法 無記名自記式の質問紙調査。病棟婦長を通して配布し、個々の郵送により回収した。調査依頼にあたって、紙面で研究の目的、個人名が特定できないことなどを説明し、協力を得た。

4. 調査内容 質問紙は、前述の概念枠組みをもとに原案を作成し、13名の看護職者にプレテストを行い、修正した。質問項目は「社会性を培う活動」30項目(社会的活動18項目、家族的活動12項目)、「身体・精神状況」7項目、「勤務状況・職業に関する活動」9項目、「属性・世帯に関する属性」6項目、「休日に一番したいこと」の自由回答で構成される。なお「社会性を培う活動」は、4段階評価による回答形式とした。

30項目から成る「社会性を培う活動」尺度の妥当性については、構成的妥当性は因子分析(バリマックス直交回転、6因子、主成分法)で累積寄与率41.30%である。また因子分析結果と概念枠組みのサブカテゴリーとの一致率は、83.3%であった。表面妥当性は、概念枠組みに基づいて作られた質問であり、プレテストを経ていることから、内容が適合していると考える。また信頼性は内的整合性法の算出によって確認した。信頼性係数 $\alpha = 0.91$ であり、信頼性が高いといえる。

5. 分析方法

- 1) 「社会性を培う活動」の質問項目を、最高を4点、最低を1点として得点化する。
- 2) 一次集計を3交替勤務者(以下3交替群とする)・当直オンコール勤務がある者(以下当直群とする)・日勤のみ勤務者(以下日勤群とする)の3群別に分けて行い、傾向をみる。
- 3) 勤務形態の3群間(3交替群、当直群、日勤群)で、「属性・世帯に関する属性」「勤務状況・職業に関する活動」「身体・精神状況」の各項目について、 χ^2 検定およびF検定を行い、差を分析する。

4) 「休日に一番したいこと」の自由回答内容を、研究者4名で検討する。その上で身体面・精神面での充実など、4カテゴリー9項目に分類して集計する。これを勤務形態の3群間で、 χ^2 検定を行い、差を分析する。

5) 勤務形態の3群間で、「社会性を培う活動」の各項目について、Kruskal-Wallis検定を行い、差を分析する。

尚、分析には統計ソフトHALWINを使用した。

VI 調査施設における勤務時間・勤務体制

日勤のみの勤務体制に該当するのは、外来、中央材料室、保健指導科の勤務者である。当直オンコールの勤務体制に該当するのは、中央手術室の拘束勤務者及び婦長当直者である。病棟はすべて均等3交替制をとっており、病棟の特殊性に応じて早出や遅出などの勤務を工夫している。夜勤回数は月8回夜勤で、準夜勤・深夜勤の人数は病棟により2~3名となっている。

VII 結果

回収数は329人(74.8%)であり、そのうち有効回答は306人で(69.5%)であった。

1. 対象者の背景

1) 属性・世帯に関する属性 (表1参照)

306人中、女性305人、男性1人であった。平均年齢は33.9歳で、年齢階級別にみると図2のとおりで、20歳代が47.4%、40歳代22.6%、30歳代が21.9%と続く。家族との同居は78.1%であり、残り約2割が一人暮らしである。配偶者と同居は40.8%、父母と同居は55.2%、子どもと同居しているのは33.7%、うち乳幼児の子どもが6.5%、その他の兄弟姉妹や祖父母などとの同居は22.5%である。また「家族の中に介護を要する人がいる」が6.6%、子どもの同居がある人の中で「子どもの急病などの時、世話をする人がいる」のは、77.7%であった。

2) 勤務状況・職業に関する活動 (表1参照)

勤務形態別では、3交替群が249人(81.4%)、当直オンコール群が30人(9.8%)日勤群が27人

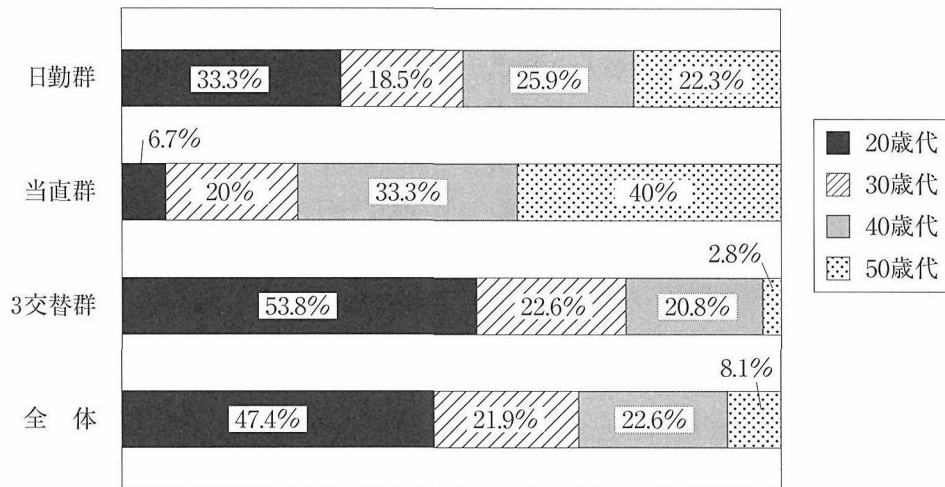


図2 勤務形態別年代別割合

表1 3交替群・当直群・日勤群の比較

(χ^2 検定およびF検定)

	質 問 項 目	3 交替群	当直群	日勤群	全体	χ^2 値又は F 値	p 値
属性・ 世帯に 関する 属性	人数 (人)	249 (81.4%)	30 (9.8%)	27 (8.8%)	306 (100.0%)		
	平均年齢 (歳)	31.9	45.7	38.5	33.9		
	家族と同居 (%)	75.5	90.0	88.9	78.1	5.31	0.070
	配偶者と同居 (%)	35.7	73.3	51.9	40.8	17.14	0.000**
	父母の同居 (%)	57.8	40.0	48.1	55.2	4.09	0.132
	子どもの同居 (%)	29.7	56.7	44.4	33.7	10.25	0.006*
	乳幼児の子どもと同居 (%)	6.4	6.7	7.4	6.5	13.09	0.042*
	その他の家族と同居 (%)	24.9	6.7	18.5	22.5	5.37	0.068
	介護を要する家族あり (%)	7.7	3.3	—	6.6	2.91	0.233
勤務状 況・職 業に関 する活 動	子どもの同居がある人の中で、子どもの 急病などの時世話をする人がある (%)	80.0	81.3	58.3	77.7	2.94	0.230
	先月の平均休日 (日)	10.2	9.6	10.7	10.2	5.01	0.007**
	先月の土日祝日出勤 (日)	5.0	1.3	0.5	4.2	71.51	0.000**
	先月の残業 (時間)	8.4	15.4	9.3	9.2	6.96	0.001**
	勤務はまあまあ希望通り (%)	82.6	69.2	76.1	81.0	3.08	0.215
	家族のことで勤務交代を希望したこと がある (%)	38.5	50.0	51.8	40.9	3.14	0.208
	子どもの同居がある人の中で、子どもの ことで過去に配置換えを希望した (%)	48.1	47.1	66.7	50.0	1.51	0.470
	職業に関する学習をしている (%)	56.6	70.0	55.5	57.8	2.03	0.363
身体・ 精神状 況	睡眠時間が少ない (%)	75.9	73.4	55.5	73.9	5.87	0.053
	睡眠不足を感じている (%)	65.1	66.7	48.1	63.7	3.14	0.208
	食事時間が不規則である (%)	81.5	70.0	55.5	78.1	10.88	0.004**
	休日はゆっくり休養する (%)	52.6	46.7	40.7	51.0	1.48	0.477
	疲労感を感じている (%)	85.1	83.3	77.8	84.3	1.02	0.600
	精神的な不安定を感じている (%)	52.6	46.7	48.1	51.6	0.52	0.770

*は $p < 0.05$ 、**は $p < 0.01$

「先月の平均休日」「先月の土日祝日出勤」「先月の残業」の3項目はF検定、他の項目は χ^2 検定

(8.8%)である。先月の平均休日日数は10.2日である。土日祝日の出勤があった人は245人の中で、その平均は5.1日である。尚この月は2000年5月にあたり、暦日上の土日祝日は11日間である。先月の総残業時間は0～45時間とバラツキがある。もっとも多いのは10時間であり、残業をした人の中での1ヶ月間の平均残業時間は9.7時間である。

「勤務はまあまあ希望通り」が81.0%となる。また勤務の発表時期は「2週間前」「1週間前」をあわせて82.0%となる。「家族のことで勤務交代を希望したことがある」人は40.9%、子どもの同居がある人のうちで「子どものことで過去に配置換えを希望した」のは、50.0%である。また「職業に関する学習をしている」人は、57.8%である。

3) 身体・精神状況 (表1参照)

「睡眠時間が少ない」73.9%、「睡眠不足を感じている」63.7%、「食事時間が不規則である」78.1%、「休日はゆっくり休養する」51.0%、「疲労を感じている」84.3%、「精神的な不安定を感じている」51.6%と回答している。

4) 休日に一番したいこと (表2参照)

休日に一番したいことを自由に記載してもらった結果、「眠る・身体を休める」「のんびりする・ゆっくりする」「旅行に行く」「友人と会う」「遊ぶ」「趣味やスポーツをする」「学習する」「家族

と過ごす」「家事や買い物をする」という9つに大別できた。中でも、「眠る・身体を休める」は、40.3%と他項目と比べて群を抜いて高い。2番目が「趣味・スポーツをする」で23.1%、3番目は「旅行に行く」で18.0%となっている。

カテゴリー別にみると、「職業以外の個人的な活動」が58.5%、「身体・精神面の充足」は半数以上の55.6%と、それぞれ半数以上が答えている。

2. 三交替群、当直群、日勤群の「属性・世帯に関する属性」「勤務状況・職業に関する活動」「身体・精神状況」の傾向

1) 属性・世帯に関する属性 (表1参照)

勤務形態別の平均年齢は、3交替群が31.9歳、当直群が45.7歳、日勤群が38.5歳と開きがある。年代別では図2のとおりで、当直群は50歳代の割合が最も高く、20歳代が最低となる。3交替群は半数以上が20歳代で、50歳代が最も少ない。

家族と同居を比較すると、3交替群75.5%、当直群90.0%、日勤群88.9%で、3交替群が他群と比べて低い。配偶者と同居の比率は、3交替群35.7%、当直群73.3%、日勤群51.9%で、3群間に有意水準1%で差がある。子どもとの同居は3交替群29.7%、当直群56.7%、日勤群44.4%で、3交替群が少なく、3群間に有意水準1%で差がみられた。また乳幼児だけについてみても、日勤群に

表2 休日に一番したいこと 自由回答

		()内は% (χ ² 検定)					
		3交替群 N=242	当直群 N=28	日勤群 N=25	全 体 N=295	χ ² 値	p値
身体・精神面 での 充 実	眠る・身体を休める	99 (40.9)	9 (32.1)	11 (44.0)	119 (40.3)	0.95	0.621
	のんびり・ゆっくりする	37 (15.3)	2 (7.1)	6 (24.0)	45 (15.3)	2.91	0.234
		136 (56.2)	11 (39.2)	17 (68.0)	164 (55.6)		
職業以外の 個人嗜好的 な活動	旅行に行く	47 (19.4)	4 (14.3)	2 (8.0)	53 (18.0)	2.29	0.318
	友人と会う	32 (13.2)	3 (10.7)	1 (4.0)	36 (12.2)	1.86	0.394
	遊ぶ	8 (3.3)	1 (3.6)	1 (4.0)	10 (3.4)	0.04	0.982
	趣味・スポーツをする	54 (22.4)	10 (35.7)	4 (16.0)	68 (23.1)	3.28	0.194
		141 (58.3)	18 (64.3)	8 (32.0)	167 (58.5)		
職業に関する学習をする		4 (1.7)	1 (3.6)	2 (8.0)	7 (2.4)	4.13	0.126
家族的活動	家族と過ごす	22 (9.1)	4 (14.3)	—	26 (8.8)	3.48	0.175
	家事や買い物をする	21 (8.7)	2 (7.1)	1 (4.0)	24 (8.1)	0.70	0.703
		47 (19.5)	6 (21.4)	1 (4.0)	50 (16.9)		

やや高い傾向があり、有意水準 5 %で差が認められている。父母との同居およびその他の家族との同居は、高い順に 3 交替群、日勤群、当直群である。つまり 3 交替群が既婚率が低い、3/4 の人に同居者がおり、とりわけ父母や兄弟姉妹、祖父母などの家族と同居している傾向にある。

また「家族の中に介護を要する人がいる」のは、どの群も低い。子どもの同居がある人の中で「子どもの急病などの時、世話をする人がいる」のは、3 交替群 80.0%、当直群 81.3%、日勤群 58.3%で、日勤群が他の 2 群と比べて低い傾向である。

2) 勤務状況・職業に関する活動 (表 1 参照)

先月の平均夜勤回数は準夜勤 4.2 回、深夜勤 3.3 回である。当直・オンコールの回数は 2 回の人をもっとも多く、平均 2.8 回であった。先月の休日の平均は、どの群も 10 日前後である。先月の土日祝日出勤の平均は、3 交替群 5.0 日、当直群 1.3 日、日勤群 0.5 日である。また先月残業をした人の 1 ヶ月残業時間の平均は、3 交替群 8.4 時間、当直オンコール群 15.4 時間、日勤群 9.3 時間である。休日、土日祝日出勤、残業時間はいずれも 3 群間で有意水準 1 %で差が認められる。

「勤務はまあまあ希望通り」が、3 交替群 82.6%、当直群 69.2%、日勤群 76.1%である。「家族のことで勤務交代を希望したことがある」人は、3 交替群 38.5%、当直群 50.0%、日勤群 51.8%である。子どもの同居がある人の中で「子どものことで過去に配置換えを希望した」人は、3 交替群 48.1%、当直群 47.1%、日勤群 66.7%で、日勤群に多い。

また「職業に関する学習をしている」人は、3 交替群 56.6%、当直群 70.0%、日勤群で 55.5%で、当直群に多い。

3) 身体・精神状況 (表 1 参照)

「睡眠時間が少ない」は、3 交替群 75.9%、当直群 73.4%、日勤群 55.5%で、「睡眠不足を感じている」は、3 交替群 65.1%、当直群 66.7%、日勤群 48.1%であり、いずれも日勤群が低い。「食事時間が不規則である」は、3 交替群 81.5%、当直群 70.0%、日勤群 55.5%で、日勤群が低く、3 群間に有意水準 1 %で差が認められる。「休日はゆっ

くり休養する」は、3 交替群 52.6%、当直群 46.7%、日勤群 40.7%である。「疲労を感じている」は、3 交替群 85.1%、当直群 83.3%、日勤群 77.8%で、「精神的な不安定を感じる」は、3 交替群 52.6%、当直群 46.7%、日勤群 48.1%であり、3 群間に大きな差はない。

4) 休日に一番したいこと (表 2 参照)

3 交替群では、「職業以外の個人嗜好的な活動」と「精神・身体面での充実」を約半数以上が答えている。当直群は、「職業以外の個人嗜好的な活動」が高い割合を示し、日勤群では「職業以外の個人嗜好的な活動」と「精神・身体面での充実」が逆転して、「精神・身体面での充実」を 7 割に近い人が望んでいる。

項目別にみると、「趣味・スポーツをする」「のんびりする・ゆっくりする」という答えがどの勤務形態でも多く、3 群間での有意差が認められた項目はない。

3. 3 交替群、当直群、日勤群の 2 群間での「社会性を培う活動」の差 (表 3 参照)

3 交替群と当直群では、有意水準 1 %で差があるのは、「地域のイベントに参加」「清掃・防災活動に参加」「役員をうけない」「授業参観・学校行事参加」「世間の出来事をよく知る」「広報・回覧板を読む」「ボランティア活動に参加」「子どもに寂しい思いをさせている」「配偶者と家事分担する」「そろって食事が多い」という 10 の質問項目であり、いずれも当直群の方が高い。また「近所づきあいをする」「職場以外の友人とのつきあいがある」「同居家族の負担が大きい」は、有意水準 5 %で差があり、「職場以外での友人とのつきあいがある」は 3 交替群が高く、後の 2 つは当直群が高い。

また 3 交替群と日勤群では、「そろって食事が多い」の 1 質問項目で、有意水準 1 %で日勤群が高いほかには、差はない。さらに当直群と日勤群では、「世の中の出来事をよく知る」が、有意水準 5 %で当直群の方が高いほかには、差はない。

表3 「社会性を培う活動」の3交替群・当直群・日直群の差 (Kruskal-Wallis検定 Scheffeの方法)

	サブ カテ ゴ リ	質 問 項 目	標本数			1 - 2 の差		1 - 3 の差		2 - 3 の差	
			1 3 交 替 群	2 当 直 群	3 日 勤 群	平均 順位 の差	p 値	平均 順位 の差	p 値	平均 順位 の差	p 値
社 会 的 活 動	地域社 会での 活動	近所づきあいをする	249	30	27	-47.0	0.014*	-5.2	0.954	41.8	0.167
		親戚づきあいをする	249	30	26	-24.9	0.314	12.4	0.769	37.3	0.252
		地域のイベントに参加	249	30	27	-42.9	0.010**	-30.5	0.117	12.4	0.815
		清掃・防災活動に参加	248	30	27	-55.6	0.000**	-31.1	0.096	24.5	0.429
		役員を受けたくない	245	29	26	-5.2	0.943	0.3	1.000	5.5	0.967
		役員を受けない	113	25	18	-66.7	0.000**	-40.7	0.051	26.0	0.494
		授業参観・学校行事参加	75	19	12	-46.2	0.001**	-19.9	0.421	26.3	0.416
		投票に行く	249	30	27	-27.6	0.217	-3.1	0.983	24.6	0.526
	社会に 関する 情報 収集	世間の出来事をよく知る	249	30	27	-52.2	0.004**	10.4	0.823	62.6	0.016*
		トップニュースを知る	248	30	27	-34.1	0.106	-4.4	0.967	29.7	0.404
		広報・回覧板を読む	249	30	27	-56.3	0.003**	-10.1	0.841	46.2	0.123
		職場以外の友人との交流	249	30	27	47.0	0.014*	4.6	0.964	-42.4	0.160
	職業 以外の 個人 嗜好的 な活動	曜日の決まった続きのもののテレビ番組を見る	249	30	27	9.92	0.819	-33.5	0.127	-43.4	0.132
		曜日の決まったお稽古や集会へ行く	249	30	27	-25.5	0.116	-21.7	0.242	3.79	0.975
		趣味の会、無尽会、サークルへ定期的に参加する	248	30	27	-19.7	0.432	-5.4	0.944	14.3	0.791
		同窓会・クラス会へ参加	249	30	27	-1.2	0.997	11.2	0.799	12.5	0.851
	その他 の活動	ボランティア活動に参加	248	30	27	-38.1	0.006**	-8.1	0.811	30.0	0.187
		消費者・市民グループ活動などに参加	249	30	27	-1.8	0.967	2.7	0.932	4.4	0.893
家 族 的 活 動	家族に 対する 意識	団らん時間が少ない	214	28	26	-9.4	0.852	17.0	0.619	26.4	0.510
		家事や家族の世話が十分できない	188	29	25	-36.4	0.090	-24.3	0.162	12.1	0.869
		接する時間が少ない	195	29	24	-27.9	0.245	-13.1	0.753	14.8	0.811
		同居家族の負担が大きい	176	25	24	-41.6	0.044*	-29.9	0.231	11.7	0.878
		仕事をしていることで家族に負目を感じる	188	27	25	-22.6	0.383	-33.5	0.146	-10.9	0.887
		子どもに寂しい思いをさせている	78	20	11	-49.0	0.004**	-13.6	0.675	35.4	0.209
		性生活に問題が生じやすい	121	21	20	-31.3	0.144	-39.2	0.063	-7.9	0.937
	家族の 行動	配偶者と家事分担する	100	23	14	-66.7	0.000**	-18.1	0.540	48.6	0.074
		そろって食事が多い	201	28	24	-54.8	0.005**	-54.4	0.008**	0.4	1.000
		家族旅行や外出をする	216	28	24	-35.0	0.110	-12.1	0.787	22.9	0.605
		家族の送り迎えをする	131	21	17	-31.3	0.144	-4.2	0.969	27.1	0.463
		勤務に配慮してくれる	181	25	20	-19.0	0.492	14.9	0.672	33.9	0.301

*は $p < 0.05$ 、**は $p < 0.01$

4：はい、 3：まあまあ、 2：少し、 1：いいえ、又は、
0：該当しない、 4：はい、 3：ややそうである、 2：あまりそうではない、 1：いいえの4段階評価

Ⅸ 考察

1. 各勤務形態の特徴と社会性を培う活動

各勤務形態別のもっとも大きな特徴は、年齢にあった。今回の調査結果では、夜勤のない日勤群が他の2群と比べて健康的な生活を送り、睡眠不

足も少なく、疲労感も少なかった。この結果は、これまでの多くの文献と同様の結果である。しかし、3交替群と日勤群とは、平均で6.6歳の年齢差があつてなお、同様の結果が出ていることに注目したい。つまり、若さでもってしても、夜勤に

よる身体・精神面への影響は解決できないともいえるであろう。

3 交替群は休日をゆっくりと休養にあてている人が半数以上で、他群より高いにもかかわらず、休日に一番したいことは、「眠る・身体を休める」という回答が多い。自分自身の健康状態の維持管理だけで、精一杯という状況であるといえよう。その上に、社会的な活動や、家族的な活動を行うことには、無理がある。当直群と比べて、地域社会での活動やボランティア活動が少ない状況は、うなづける結果である。ただし日勤群と比べると大きな差はなく、単に夜勤をしているか否かによって、これら社会性を培う活動が左右されるとは言い難い。この場合もっとも大きな影響因子は、年齢であると推察される。

また、ライフステージの視点から各勤務形態の特徴を、以下のように考えることができる。未婚期は職業に関連した活動で精一杯であるが、学生時代からのつきあいや趣味の仲間など職場以外の交流があり、地域社会との関係は希薄な時期で、3 交替群の約65%と当直群と日勤群の一部がこれにあたると考えてよいであろう。既婚で乳幼児の子どもがある時期は、職業に関する活動に余裕がでてきた分、家族的活動にかかる時間が増加し、社会的活動は多くない時期で、各群の6～7%を占めている。子どもが小学生になると学校を介した活動や交流が増加し、これにともない地域活動への参加も増える時期で、当直群や日勤群に多くなってくる。さらに年齢とともに地域社会での役割は増加し、子どもの自立によって生じた時間的な余裕から趣味や職業に関する学習ができるようになる時期は、当直群に多い。

2. 社会性を培う活動と支援体制

社会参加意欲の高い女性たちは、「家庭と仕事と社会活動の三立」という生活課題を共有しつつ、それらのバランスや限られた時間、お金などの活動資源のやりくりを頭を悩ませてきた¹⁴⁾という言葉は、実態を明確に示すものである。社会性を培う活動が不十分であると認識し、行動しにくい現状がある中でも、看護職者たちはこれにどのよう

に対処し、それぞれの社会の中で生活しているのであろうか。とりわけ家庭と仕事と社会活動の三立を要求される、3 交替勤務で子どものある看護職者は、どのようにこれらの折り合いをつけて生活しているのであろうか。

まず子育ての時期に至ったり、家族内に問題が生じた場合、勤務を変えて対応するという形で、家庭と仕事の両立をはかっている。これには勤務する場そのものを変えることと、必要に応じて勤務を交替するという方法がとられる。たとえば、子どもがある人のうちで、3 交替群、当直群では半数近く、日勤群では6割以上が、過去に配置換えを希望している。実際に日勤群や当直群の中には、希望による配置転換で現所属となっている人もいる。また勤務の希望が通しやすいことも、家庭と仕事の両立の一つの条件となってくる。

さらに家族の急な病気や用事により、勤務交代を願いでなければならないこともある。子育て途上の割合が高いであろう当直群や日勤群では、半数以上が家族のことで勤務交代を希望したことがあるという。このような家庭と仕事を両立するための勤務での対応は、職場の理解がなければ成立しない。かつて看護職は、独身女性でなければ勤まらないという時代があった。現在でも退職理由には「家庭の事情」が上位にあげられるが、働きやすい職場環境の整備とともに、先駆的に家庭と仕事の両立をしてきた先輩達がつくってきた職場の風土は、全体の3割以上が子どもと同居している現状につながっていると考えられる。

また通勤時間や通勤手段は、3 交替勤務を継続する上で、一つの課題となる。本研究対象の多くが居住する地域は、公共交通機関が至便ではないために、移動手段として自家用車が多く用いられ、対象者のほとんどが車通勤である。そのため、病院で仮眠をとってから次の勤務に出ることはほとんどなく、日勤→深夜、準夜→日勤という勤務であっても、いったん自宅に戻っている。これによりたとえ短時間ではあっても家族的活動ができる。ただし、本来休息が必要な時間を家族的活動時間にあてることによって、身体的には悪影響が生じていることも考えなければならない。

家族内支援体制は、家庭と仕事と社会の三立を考える上で、大きな柱である。まず母親が働いている間に誰が子育ての役割をとるのが、特に子どもが小さい時期には問題となる。また小学生以上となれば、学校行事などへの参加や帰宅後の子どもの世話などを考えなければならない。子どもの急病には誰がどのように対応するかという問題もある。また子どもの有無に関わらず地域での活動への参加をどうするか、日常的なつきあいをどうするかという地域社会での活動への対処も必要となる。

本調査の結果から、全体の半数以上が父母と同居しており、兄弟姉妹や祖父母などのその他の家族との同居率も2割を越える。また子どもの急病などの時の支援者を確保している人は、3交替群及び日勤群では8割にのぼる。未婚で3交替勤務をしている人も、とりわけ父母や兄弟姉妹、祖父母などの家族と同居している傾向にある。

1995年の国勢調査結果¹⁵⁾によると、調査県の総世帯数における核家族の割合は56.8%、その他の親族世帯の割合は20.5%、単独世帯の割合は22.5%である。全国平均と比べると、核家族の割合は低く、その他の親族世帯の割合は高く、単独世帯の割合は低い。またその他の親族世帯のうち、いわゆる3世代家族の割合は全国が59.7%であるのに対して、調査県は66.2%と高い割合を示す。

社会的活動及び家族的活動を、家族内支援によってまかなっているという現状は明らかであろう。ただしこの分担がどのように具体的に行われているかについては、本調査では言及できない。3交替群の方が配偶者との家事分担が低い傾向であることからみても、配偶者との分担でしか解決できない核家族とは違い、複合家族内における分担は実母や義母で解決し、家庭内性役割分業は伝統的なままであることも考えられるからである。

X 結論

1. 平均年齢は、3交替群31.9歳、当直群45.7歳、日勤群は38.5歳と差が大きい。3交替群でも3人に一人は同居の子どもがおり、当直群、日勤群ではさらにその割合は高い。

2. 夜勤のない日勤群が、3交替群や当直群と比べて健康的な生活を送り、疲労感も少ない。
- 3 交替群・日勤群では、休日は身体・精神面の充足にあてたいと考えている人が多く、特に3交替群では、実際に休日にはゆっくり休養をとっている人が半数以上である。
3. 3交替群は当直群と比べて、職場以外の友人との交流は高いが、地域社会での活動、社会に関する情報収集、ボランティア活動において低い。家族的な活動については3交替群の方が家族そろって食事をとるという項目で低く、また夫との家事分担も低い。しかし、当直群の方が、子どもに寂しい思いをさせており、同居家族の負担が大きいと感じている。
4. 3交替群と日勤群の比較では、日勤群の方がそろって食事ができると感じているが、その他の家族的活動、および社会的活動のすべてで、差はみられない。
5. 配置換えや勤務交替という方法や、車通勤による時間の捻出などにより、家族的活動を調整している。
6. 家族との同居率は高く、既婚者は特に父母や義父母と三世帯同居している人が多い。これは地域的な特徴でもある。しかし、未婚者の3交替群にも父母との同居が多い傾向がある。社会的活動や家族的活動が家族内支援によってまかなわれていると考えられる。

XI 研究の限界と今後の課題

本研究では勤務体制別の比較検討を行ったが、それぞれの群の年齢差が大きく、関連性の研究としては不十分なものである。しかし、それぞれの勤務体制の実態として、年齢は大きな特徴ではずせないものであり、ライフステージとの関連を考え全体像を捉える上で重要な要素と考えている。また調査時期は新年度開始後2ヶ月を経たところであり、就職や配置転換、昇格などの職業生活上の変化や、家族構成員の変化や家族のライフイベントなど、生活変化が大きいことが予測される。これらの影響についても、研究の限界として扱わなければならない。

今後は、因子探索研究として精度を上げ、対象の属性を考慮した研究デザインによる調査による積み重ねが必要であろう。また地域・文化による比較研究も重要と考える。

本研究調査にあたり、快く御協力して下さいました看護部、ならびに看護職者の皆様に深く感謝いたします。

尚、本研究は平成11年度本学共同研究助成を受けたものである。

引用文献

- 1) 嶋森好子：看護婦の交代制勤務を考える 交代制勤務が抱える問題を中心に、看護、50 (10)、44-53、1998
- 2) 山崎恵子、宮腰由紀子、宮崎和子ほか：勤務体制が看護婦の健康と活動に及ぼす影響に関する研究 構成要素の抽出と研究方法の文献検討、平成9年度厚生省看護課 看護対策研究総合事業 看護制度に関する研究 諸外国の変動する看護提供システムに関する研究、研究報告書
- 3) 中村恵子、竹内千恵子、土田よし子ほか：特定機能病院における交替制勤務に関する研究 3 交替勤務の問題の明確化と対応の検討、木村看護教育振興財団研究報告書、39-49、103、1999
- 4) 相垣良子、赤星秀子、藤丸眞澄ほか：交替制勤務に従事する看護婦のWrist-Activity-Rhythm 一二交替制と三交替制の比較一、第29回日本看護学会論文集 看護管理、170-172、1998
- 5) 2) と同様、104
- 6) 1) と同様
- 7) Ruth R.Alward、Timothy H.Monk、山崎慶子ほか 訳：看護婦とシフトワーク 働きやすい勤務への提言、日本看護協会出版会、33、1998、
- 8) 1997「看護職員実態調査」結果（速報）まとまる、1998.3.20、日本看護協会ホームページ ニュースリリース
- 9) 相垣良子、藤丸眞澄：二交替制勤務の導入経過と現状、看護技術、45 (5)、103-108、1999
- 10) 原ハツエ：勤務体制と体験的看護管理 12時間夜勤型二交替勤務体制を中心に、看護管理、7 (4)、244-256、1997
- 11) 桂木誠志：第14回国際夜勤交代勤務シンポジウム印象記、労働の科学、55 (2)、2000.
- 12) 連合女性局編：女性の労働・生活時間 フルタイムで働く女性1万人に聞く、労働科学研究所出版部、146、1996
- 13) 労働科学研究所編：勤務時間制・交代制、労働科学研究所出版部、114-117、1990
- 14) 井上輝子、江原由美子編：女性のデータブック 第3版、有斐閣、156、1999
- 15) 総務庁統計局：世帯の家族類型（16区分）別一般世帯数、世帯人員及び親族人員（65歳以上の親族のいる一般世帯特掲） 全国、都道府県、13大都市（平成2年・7年）、国勢調査報告書第2巻、572-573、1996

How Shift-Basis Work Affects the Sociality of Nurses

UENO Takako NAITOU Rie SUGAWARA Fumiko ASAI Michiko
ICHINOSE Takako

Abstract

Nurses understand people who are living in the society. By living in that society and culture themselves, nurses' experiences and senses gained through diverse relationships help them better understand their patients. However, there is a reality that a number of nurses find difficulty playing their full roles in the society or home under the circumstances that they work in shifts. Most nurses are women. In a society where role distinction by gender is still deeply seated, the nurses are expected to reconcile not only work and home but also society; and they are likely to compromise much to live in such a society.

The purpose of this research is to study how the shift-basis work is affecting nurses in their sociality-cultivating activities.

The following are findings from the questionnaire-survey of 440 nurses who work in a general hospital:

1. The average age of the nurses was 31.9 years old in the 3-shift group, 45.7 in the night shift, and 38.5 in the day shift, which shows a large difference between these groups. One-third of the nurses in the 3-shift group have a child or children living with them, and the percentage of such is even higher among nurses in the night shift and day shift groups.
2. The day shift group, without having to work on night shifts, tends to live healthier and be less tired than those in the 3-shift or night shift groups. Many of the 3-shift and day-shift groups consider off-days for their physical and mental refreshment. Particularly in the 3-shift group, more than half people actually try to take enough rest on their holidays.
3. Compared to the night shift, the 3-shift group socializes more with friends and acquaintances outside work, but are less active in local community activities; seeking information about the society, and volunteer services. Fewer people have meals with their families and share household chores with their husbands among the 3-shift group, but more night-shift nurses feel that their work makes their children lonely and places a greater burden on other family members.
4. When comparing the 3-shift and the day-shift, more people of day-shift feel that they can usually dine with their families, but that there were no outstanding differences with regard to other family activities or overall social involvement.
5. By changing work sections or shift arrangements, or by saving more time by driving to work, the nurses arrange time for their family activities.
6. The percentage of nurses living with their families is high, and many of the married ones in particular live with their parents or parents-in-law. In many cases 3 generations live together. This is a tendency typical of this region. However, even among single nurses in the 3-shift group, there was a tendency to live with their father and mother. It is considered that social and family activities are managed with great support from family members.